

## バイカルシベリアにおけるOIS3段階の人類遺跡群と出土動物化石群

○佐藤孝雄<sup>1</sup>, 加藤博文<sup>2</sup>, 吉田邦夫<sup>3</sup>, 増田隆一<sup>4</sup>, 國木田大<sup>3</sup>, 鈴木建治<sup>2</sup>, 佐藤丈寛<sup>4</sup>, 久高将臣<sup>5</sup>,

A. Klement'ev<sup>6</sup>, F. Khenzykhenova<sup>7</sup>, E. Lipnina<sup>8</sup>, G. Medvedev<sup>8</sup>

1.慶應義塾大学文学部, 2.北海道大学大学院文学研究科, 3.東京大学総合研究博物館, 4.北海道大学大学院理学研究院,  
5.琉球大学医学部, 6.イルクーツク技術大学古代技術研究所, 7. RAS地質学研究所シベリア支部, 8.イルクーツク大学歴史学部

バイカル湖周辺域は、最終氷期、解剖学的現代人がユーラシア北東部や新大陸へと進出するに必要な様々な文化的適応装置を開発・獲得した地域であったと目されている。発表者らは、同地域に数多く分布する上部更新世遺跡の調査を進め、OIS3 段階における人類の環境適応行動を多角的かつ領域横断的な共同研究によって解き明かすことを計画。科研費の採択を得て、本年度より同研究を開始した。

今夏はブラーツク貯水池南岸に位置するバリショイ・ナリン遺跡(53°N, 103°E)<sup>1</sup>で発掘調査を実施し、カルギンスキー亜間氷期(約 25ka BP - 55Ka BP)の古土壌層中から石器や骨器、ウマを主体とする哺乳動物化石を多数採集、併せて炉址に由来するとおぼしき炭化物の集中も検出した。また、イルクーツク市滞在中は、近年市街地の再開発に伴って発掘されたグラシモフ遺跡、セドーヴァ遺跡の資料調査も行った。

本共同研究の成果の一部は、既にウェブサイト(<http://www.flet.keio.ac.jp/~sato/21251009/>)にも公開している。次年度以降は、上記3遺跡の石器・骨角器・動物化石の精査を進めるとともに、バイカルシベリアの既知の更新世遺跡群を網羅するデータベースを構築すべく、必要な情報の収集・整理にも努めてゆく。

<sup>1</sup> Sato T. *et al.* (2008) Vertebrate fossils excavated from the Bol'shoj Naryn site, East Siberia, *Quaternary International* 179: 101-107.